発掘調査私論

竹井治雄

1．私心的発掘論

私が在職する当センターでは、創立20周年を迎えて「論文集Ⅳ」が刊行されることになった。この論集は職員の全員参加をモットーに、日ごろの研究成果を発表する場でもある。言い換えれば、職員の存在の証明であり、世に資質を問われるものである。私は日ごろから学問・研究といったものを苦手としており、仕事(発掘調査)に係わる「勉強」は少しはするが、文章化するほど体系的に考察していない。それ故、私の過去20年間の発掘調査の中で勉強したり、考えたこと、思ったことを徒然なるままに書かざるを得ない。

私は、遺跡に対峙するとき、調査員は遺跡を調査する「技術者」であるばかりか、「考古学」の実情も把握していることに越したことはないと思う。さらに、遺跡調査を実施する環境、周辺の現状こそ最も念頭に置いておかねばならない。この三者の狭間にあって実際調査を実施してきたが、なかなか満足するに至らず、むしろ不満足だらけである。しかし、どんな調査でも一つはささやかな喜びが有るものである。それは自己満足、自慰的なものであっても「技術者」としての誇りの様なものである。ところが、このプライドには大きな「不安」というものが付きまとい、プレッシャーとしてあらわれる。最大のプレッシャーは「遺跡調査は後に戻れぬ一回限りの調査」であるが故、遺跡・遺構・遺物に向かいあっている過程そのものに現れるものである。

発掘調査に携わる技術者は、埋蔵する遺跡（遺構・遺物等）を精査してその有無を確認することから始まる。そして、観察・検討を繰り返しつつ掘りすすめる。次第にその性格、時期、形態、規模等を確認し、その有り様を写真撮影、実測作業によって正確に克明に、記録する。さらに、その成果を現地説明会、報道等でリアルタイムで発表し、調査終了後には報告書を作成する。現場担当者は、このように多種類の技術を習得していなければならないが、近年、花粉分析、プラントオパール、蟯虫卵等の土壌分析、磁気探査やＣ14探査、年輪による実年代の測定等を専門機関に委ねるようになってきた。大規模の調査では、写真撮影、測量（実測）作業も外部委託することが増えてきた。その結果、調査期間が短縮され、より多くのデータが蓄積され、場合によっては、遺跡の性格を決定的なものにする。

果たして現場担当者は「楽」になったものと思われがちだが実はそう簡単でなく、逆に難しい面が多くなってきた。それは、考古学が内在する問題を表面化しただけでなく、今後、変容する考古学、遺跡調査の行方を示すものであると思われる。

私は、発掘調査の「技術者」の立場から、この今日的な状況を見つめることにする。

考古学における発掘調査は、大きく次の二つの理論、法則を基に実施される。一つは地質学の「地層累重の法則」である。この法則は幾重にも重なる地層が乱れていない限り、上位の地層は下位の地層より新しいという、相対年代を把握するシンプルな理論である。断面観察のみならず、平面的な広がりにも応用される。もう一つは「型式学」である。これは、物質(遺物)の形、文様は変化するというものである。進化したり退化したりする変化の順番をやはり相対的に把握しようとする学問である。近年その学問は著しく進歩しており、相対年代の幅が狭くなり、限りなく近い実年代が分かるようになってきた。この両理論を実際の遺跡調査に活用して、遺構、遺物を発見、検出して考古学的資料とするものである。さらに、膨大な資料は集積され、分析され、解釈される。過去の事象はこの過程で復元されるが、再構築にあたって、多くの学問領域に踏み込まざるを得ない特質を持つ。

私の発掘調査における基本姿勢は観察力、執念、「調査をやり切ること」の3点である。観察力は己の五感を駆使し、とりわけ「目」が主な機能である。単に視力が良いというのでなく、対象物を脳裏に焼き付くまで見続けることである。さらに、最も大事なことは、焼き付いたものを絶えず変化させていることである。例えで言えば、対局している将棋盤の局面は指さない限り止まっている。しかし、その指し手の脳裏には次ぎの最善手を選ぶため、幾種類の局面を描いている。この観察力の柔軟性こそ、遺跡を掘っていく過程を保証する唯一のものと思われる。もっとも、ある対象物をきちんと精査(地層の断面、平面を平たく、明瞭にすること－発掘作業ではガリかけと呼ぶ)することは言うまでもない。ところが、この作業をなおざりにして、観察するにしても何も見えてこない。見えた部分だけで掘り下げようものなら後が大変である。土の表面を出来るだけきれいに「鏡の如く」精査を繰り返し、見える(納得する)までという執念は大事にしたい。

地下に有る遺跡の大半は「土」で造られ、「土」に埋没している。調査は、人工的に穿ったものとそうでないものとの峻別する作業は、先述の観察力、執念をもって、あたかも追体験が如く掘り進める。調査期間を通じてこれが大いにプレッシャーとなる。何故なら遺跡調査は、独りでは出来ない事は勿論のこと、社会的制約の中で遺跡調査を「させて戴いている」からに外ならない。これに答えるためには冒頭で述べた基本姿勢、「調査をやり切る」ことである。意気込みとか決心とかの精神論で片付くものでない。調査の準備の段階で、終了までの計画を立て、具体的にそのイメージを確実なものにすることである。調査前の遺

跡に対しての下調べは、過去の周辺の調査例、地形図、航空写真の読み取り、その地域での聞き取り等様々な方法がある。どれが有効だというわけでなく、すべて可能なかぎり行った方が良いに違いない。遺跡は有るのか、無いのか、また有るとすればどの様な遺跡か、無いとすれば、何故無いのかを検証する。また将棋の例えになるが、対局前の戦略・戦術の構想に似通うものであり安心を得るものである。しかし、将棋にしても、発掘調査に於いても始まってみるとイメージはたいてい違ったものになるのが普通である。イメージに固執しすぎると、あとのダメージが大きすぎることには注意がひつようだ。私は「仏師が木隗を前にして、その内に居られる仏様をただただ彫らさせて戴くに過ぎない」態度、心構えが好きだ。そう在りたいと調査中いつも願っている。

2．私的経験発掘論

調査員は調査中に判断を迫られる。それは、遺構の掘削、写真撮影、遺構実測等、多種、多様であり、数え切れない。私は自分の判断について同僚から異論をとなえられたことも少なくない。その際、説明を求められるとできるだけ答えるようにはしている。それでは、説明しても納得してもらえない決定的な、然も不可思議な未だ結論が出ていない事象について、私が携わった過去の調査について書くことにする。

ある調査で、弥生時代(推定)の水田跡を検出したが、実は「遺構としての水田跡ではない」という疑義が生じた。それは、「コピーである」と言うのである。これには流石の私も怒気面を抜かれ、吃驚した。私は、このままでは水田の幻影を掘ったことになり、遺構を作った確信犯になる。この疑義について少しは議論したが、今に至っている。耳慣れない「コピー」とは何か、水田遺構とは何かを問い直し、問題点を整理してみたい。

水田跡を最初に見つけだしたのは、調査の中間点に差しかかったとき、中世から長岡京期の遺構の空中写真撮影を行った時である。Ａ１版の写真を読む(ソイマール)と黒い格子状の遺構が朧げに見えた。早速、調査地にたって目認したところ、土質の違いは明瞭でないが、水田の畦畔であるらしいと思われた。尚、この水田地帯と方形周溝墓群との間には、幅２ｍ、長さ60ｍ以上の直線をなす大畦畔も見つかっている。 引き続き、精査を行い、黄褐色粘質土、砂質土の違いはあっても相変わらず判然とせず、移植ゴテで線を引く段になるとなかなか進まない。20cm程の間隔を持つ２条の波線が漸く引けるころには水田の畦畔であると認められた。一枚の大きさは２×３、３×５ｍで連綿と100枚以上数え、おおよそ1000 m^2に広がる。畦畔の断面形態は、台形を呈する。その規模は、上辺20～30cm、下辺30～40cm、高さ20cm程である。土質は主に黄褐色粘質土であるが、黄灰色砂質土が斑点状に混在する。これは、恐らく周辺の土（耕作土）を盛って築き上げたものであろう。また、畦

畔には所々に「水口」があり、淡い黄褐色シルトが堆積する。畦畔に囲まれた耕作部分は、黄灰色砂質土の単一層である。下層の所謂「床」は、堅く締まった茶褐色粘質土である。ここでは稲株の痕跡が認められたことから、耕作土でもあるとも考えられる。

以上の事象から、形態的には水田跡であると経験上言えるものであるが、堆積土そのものからは、これが耕作土、これが床土であると明言できるものでない。そこで土壌分析(プラントオパールの定量分析)を調査終了間際になって実施した。結果は、サンプリングに少し問題が有ったものの、分解されにくいプラントオパールは検出されず、皆無であった。どこに行ったのか、それとも最初から無かったのか、何れにせよ水田跡でないのである。形態的には万人が認める水田跡がそうでないとすれば稲以外の作物が有ったのか、正に不可思議なことになった。

私はこの問題について水田跡の概念の違いから起きたものと思われる。水田の土壌は、有機質特に植物質等の腐植質が多く含まれており、粘性が強く、永く水漬きの状態であったため還元作用による青灰色を呈すると言われている。私はこの概念規定に賛成である。しかし、地下に有る遺構、遺物は水、空気、温度、圧力等様々な要素で変化する。言い換えれば化石化の一途を辿っているのである。遺構の変化は還流、置換、純化、圧縮、膨張作用によるものであるが、「時間」によって化石化の進捗は異なる。沖積地の現代から平安時代の水田跡の断面観察すると、耕作土は下位に行くに従って、灰色は薄く、淡い色に変化し、粘土質から砂質土に変容している。 今回の水田跡の場合は、漂白化、砂質化がすすみ、純化作用、置換作用によって、本来持っていた性状が失われたものと思われる。

「コピー」説はこの水田跡問題の最中突然現れた。この説は水によって、遺構がその下位で同形に写し出されると言われる。これに似た現象は、常時に滞水する溝の側面、底には「染み込み」による還元状態が盛んに観られ、時として掘り過ぎることがある。しかし、それは平面・表面的なもので、決して立体的なものでない。仮に、コピーであるにしても、畦畔の盛り土、水口の痕跡まで立体的に「表現」出来るものか疑問である。今後そのメカニックが明らかになることを望む。

(2000年5月脱稿)

(たけい・はるお＝当センター調査第1課企画係主査調査員)